

フランスにおけるケアの哲学／倫理学の現在

ジャン＝フィリップ・ピエロン Jean-Philippe PIERRON

石井雅巳 訳

渡名喜庸哲 解題

本稿は2023年4月13日に立教大学において行われたワークショップ「フランスにおけるケアの哲学／倫理学の現在」でのジャン＝フィリップ・ピエロン氏の発表原稿の翻訳である。ピエロン氏の発表は、主として自身の著書『自然と人間をケアする——医学、労働、環境』(Prendre soin de la nature et des humains: Médecine, travail, écologie, Les Belles Lettre, 2019)の抜粋からなるものであったため、本稿も概ね同書の抜粋訳になっている。ただし、タイトルや節分け(節タイトル含む)は訳者によるものである。また、[]内は訳者による補足である。

1. ケアの哲学の系譜学

哲学と医学の関係が哲学と同じくらい古いものだとしても、ケアの哲学はその関係をまったく別の仕方でも再編するものです。ケアの哲学には歴史がないようにも思えますが、それはむしろ哲学の歴史を再構成するものなのです。ケアの哲学が哲学に加わったのが最近のことだとしても、ケアの哲学は哲学の根本的な身振りを刷新するものでないでしょうか？ ケアの哲学の系譜学はどのように可能でしょうか？

ソクラテスは、哲学をケアすることによって哲学的な語りを創設しました。産婆術は、出産という、傷つきやすさ(vulnérabilité)の主たる形象ともいえるものにまつわる技術です¹。プラトンが『テアイテトス』で述べているように、産婆術とは、論証に関わる「お腹の大きな」人間の内的な妊娠に関わるケアです。この語の選択は単なる偶然ではありません。出産を助けるというこの根本的な技術は、ケアの独自性を表現するものです。裸であること、自分の生命力そのものに対する不安、貧窮、いかようにもなることが、出産の脆弱さをあらわし、人間の条件に対する反省をもたらすからです。人間と呼ばれる生きものは、やっと生まれたばかりであると同時に、苦しむには十分なほど年齢を重ねています。ケアは、もろもろの存在者の誕生から死にいたるまでその進展に伴い、各人が根本的に自分自身になることを可能にするのです。

プラトンは、エピメレイアというテーマを通してこの問題をさらに都市のケアへと広げています。このエピメレイアは、「ケア(soin)」と訳すことができます。これは、まずはホメロスやヘシオドスにおいて、次いでプラトンにおいて、人生のあ

らゆる困難（仕事、子ども、都市）に対する関心を意味しています。なかでもプラトンはその対話篇『アルキビアデス』において自己に対するケア（自己への配慮）を都市に対するケアと結びつけています。ゆえにケアの哲学は、医学的パラダイムのうちに、私たちの内部の、私たちと私たちのあいだの、そして私たちの外部の、〔三様の〕傷つきやすさに対する横断的な関心を見出すことができるのです。

ケアの哲学は、哲学において古くからある医学的メタファーの用法を継承しています。ただし、そうしつつも、ケアの哲学は、傷ついた存在（vulnus）に対して人々が抱いている古くからある問いを刷新します。ヒポクラテス学派とプラトン主義者たちのテキストは、政体（政治）の概念と医学のパラダイムについて相互に参照することで、豊かなものとなっています。エピクロスは、自らの哲学を四重の治療法として考えていました。ローマ人たちは女神クーラ（Cura）——ケア（care）はここから来ています——の神話に思いを巡らせることで、人間は土（テラ）と精神（ジュピター）でできているが、ケアによって陶冶されると考えていました²。アウグスティヌスは傷つきやすさについて「傷つきやすくない人、傷つくことがない人がいるのは、傷つけられる必然性がないからではない」と述べています³。ルソーは人間に対して病む人間の治療法として一つの政治哲学を練り上げました⁴。

2. ケアの詩学

ケアの哲学が、社会や世界について考えるためのメタファーの歴史に新たな契機をつけ加えるのだとすれば、それはどのような次元なのでしょう。ここで重要なのは、ケアについてどう認識するか、ケアがどう存在しているかです。ケアの哲学は、もはやケアをモデルとコピーとのあいだの模倣の関係（医師自身あるいは医師のもつ合理性を到達すべき理想とするプラトンの鏡像モデル）から考えてはなりません。むしろケアの哲学は、関係する現実の理解を再形成するミメシス的なプロセス（ミメシスを他のさまざまな可能性の探求だとするアリストテレス的な演劇モデル）として問題を検討します。ケアは「生きたメタファー」⁵として理解されるべきなのです。メタファーは、前理性的な言説でも文彩でもなく、他のさまざまな可能性を探ることで私たちの理解を増進させてくれます。ケアの詩学というものがあれば、この意味論的・実践的な刷新を試みることで、次のように問うでしょう。すなわち、私たちがさまざまなケアの関係から出発して考えるなら、共通の世界をケアするとはいかなることだろうか？ 世界を支配するのではなく、世界と関わり合うべきなのだとしたら、世界をケアするとはどのような意味だろうか？ こうした詩学は私たちの世界の経験を、ケアの別名ともいべき深い注意（attention）として解釈しなおすのではないで

しょうか？

生きたメタファーとしてのケアは、古代ギリシア人における「環境への配慮」、つまり「オイケイオシス (oikeiosis) [親密化、愛着]」、古代ローマ人の「治癒 (cura)」や「配慮 (sollicitudo)」、さらに近年の現象学の「気遣い」など、古くからのテーマを語彙的・理論的に刷新するものです。ケアという語は、古典的な語彙のうちにはなく、哲学に関する辞典にも載っていないため、その哲学的な一貫性を疑う必要があります。問題や論点を乱雑に詰め込んだ言葉を用いれば、「すべてがケアであり、すべてをケアする」とも言えてしまうでしょう。この新しい言語が、先立つ哲学的伝統の記憶の忘却を目指すのでないならば、その射程はどれほどのものでしょうか？ リクルールの言葉を再び用いれば、[ケアという語が] 述語としては適さないとしても、既成の言語によって眠らされたり麻酔をかけられたりしている私たちの世界に対する注意が再び呼び覚まされることになるでしょう。つまりその不適切さは、むしろ感覚的な関係を表現することができる言語を生み出すのではないのでしょうか？ あるときルネ・シャールは「名づけることが不可能なものを名づけることを恐れてはならない」と語っていました。

3. 経済主義に立ち向かうケア

ケアは、市場経済と市場社会によって支配されている多元的で世俗化された私たちの社会において、新たな語彙の布置を創設します。そして、それによって私たちの配慮に対する理解が刷新されることとなります。ケアは、交換関係に還元しえない関係について反功利主義的なアプローチをとりますが、これにより、家庭内の問題が政治的・文化的な問いへと変換されることとなります⁶。ケアは、個人化された関係だけでなく、個人を形成するような関係の質や、効果的な実践、さらに（ケアの提供者など）これらの関係に配慮する制度に注意を払うことで、ホモ・エコノミクスによって縁取られた人間学を批判します。ケアは、このような人間学が支持するような、遠くにいる者との関係に麻酔をかける〔関心を払わなくなる〕ような暴力に立ち向かいます。ギュンター・アンダースはこれを「遠隔殺人」と呼びました⁷。アンダースは逆に、同類に対する想像力を維持しようとする試みのなかに、傷つきやすい人々の呼びかけに応えるようなケアを見たのです。彼が抗弁するのは、同情の心をもちつつも、疲れ切って恐るべきものに慣れてしまうというかたちで、個々人の感受性が暴力を被るという不幸な経験に対してなのです⁸。

捕食的で破滅的な経済主義によって攻撃されている相互の傷つきやすさを意識すること、これは、①ケアの問い、② MAUSS (Mouvement anti-utilitariste en sciences

sociales：社会科学における反功利主義運動）の活動が検討する贈与の問題⁹、③共生主義、④フランクフルト学派の思想家（ホネット¹⁰、ローザ¹¹）によるまだ目に見えない生命を承認するというテーマを伴う社会哲学、⑤さらにマーサ・ヌスバウムによる人間開発の哲学およびケイパビリティの分析〔といった様々な主題群に〕に橋を架けることになります。社会的・環境的な不正義について、このアリストテレスの優れた解釈者〔ヌスバウム〕は、ケイパビリティに関する仕事をケアと結びつけ、次のように呼びかけます。

人間の人間的なケイパビリティを包括し、維持することにとって重要なのは、社会的な協力とその動機についての新たな説明を要求する。その説明は単に相互利益だけではなく、博愛と利他主義に焦点を当てたものである¹²。

この新たな説明という作業、類比のミメシス的な機能こそ、ケアが行うよう求めているものなのです。

4. ケアの哲学とケアの倫理

北米におけるケアの倫理学および政治学を〔フランスに〕知らしめたサンドラ・ロジエの『他者たちのケア』¹³の後に、フレデリック・ヴォルムスの『ケアというモメント』¹⁴、コリーヌ・ペリュションの『傷つきやすさの倫理のための諸要素 (Éléments pour une éthique de la vulnérabilité)』、ファビアンヌ・ブルジェールのケアの倫理についての仕事、ギヨーム・ルブランの『私たちの傷つきやすさをどうするか?』¹⁵などが相次いで出版されました。これらはミシェル・フーコーが「時代の分泌物」と呼んだ知的なモメントが確固としてケアにあることを示しています¹⁶。「ケアというモメント」は、束の間の定式化などではなく、問題の提起の仕方に磨きをかけ、人々が自分自身との関係や人間ならざるものを含む他者との関係、そして世界との関係において、自分自身を理解するための解釈の枠組みに修正を迫るものなのです。

ケアは、数ある道徳および倫理の問題の一つなのではなく、倫理学や道徳哲学の包括的な原理であるかもしれない¹⁷。

たとえケアの倫理が医療倫理学、動物倫理学、環境倫理学において明示化され、仕事や家族の絆の倫理を再評価するものだとしても、ケアの哲学は応用倫理学ではありません。倫理学のこうした分散化は、専門的で、複雑で、多元的な問題に関わっ

ているだけに、その統一性には問いが付されていますが、ケアの倫理は、ケアの哲学の実践的な表現なのです。そしてケアの哲学は、ケアの倫理にとっての期待の地平と言えるでしょう。傷つきやすさへの注目はさまざまな形態をとるわけですが(苦しんでいる人、暴行を受けた動物、環境の不安定さはそれぞれ、医療における徴候、獣医ケアラーのための表現、環境への配慮における居場所という三つの項目に対応します¹⁸)、その注目はこれら多様な形態を統合する原理となりえます。傷つきやすさへの注目は、倫理学的言説の根底にどのような哲学的人間学があるかを問い、技術的・倫理的・存在論的な次元でケアについて考えるよう私たちを促すのです。

5. ケアと文化人類学

ケアは、それを実践する人々からも、それを実現するための社会的・政治的条件からも独立しているわけではありませんし、それが展開される文化に関係がないわけでもありません。ケアラーの年齢や性別の問題は無視できませんし¹⁹、それが参照している文化も蔑ろにはできません。この文化とは、ケアが意味や形をもって生じるための解釈の枠組みや象徴的な世界を展開するものです。だとすれば、自然主義的、類比的、アニミズム的、トーテム的といった〔地域ごとにさまざま異なる〕人類学において²⁰、ケアはどのような意味をもつでしょうか？ (漢方、アールヴェエダ、ンガンガの伝統医学など)〔西洋の〕生物医学的な医学とは異なる医学についての議論、アニミズム的ないし類比的な存在論〔が通用する地域〕における生態学的持続可能性の考え方と生き方、異なる文化において労働がどう承認され、位置づけられているかなどが、主たる争点となるでしょう。中国や日本の伝統にとっては、類比的な思考のカテゴリーのもとで、さまざまなケアの哲学が綴られています。そこでは私たちが目にする人工物とは異なる地位がロボット工学に与えられています。また、オーストラリアのトーテミズムにおいては、分類による世界の管理が、改装し整備する者(aménagement)の論理に抵抗しています。しかし、現代の西洋文化におけるケアの哲学のほとんどが、「自然主義的存在論」にふさわしい非宇宙的・無世界主義(l'acosmique)のただなかに位置しており、それを克服しようとしていることを認めなければなりません。フィリップ・デスコラは、その構造的特徴を説明しています。自然主義は、人間とその他の存在との同一性と差異を確立し、個人的経験や集団的经验を構造化するために、類似した物理性をもつもの(物質世界とその身体的表現)と、さまざまな内部性(非物質原理、親密な力)〔の区別〕の認識に立脚しています。ケアを彩る以上に、これらのカテゴリーはケアを構造化し、様式化しているのです。精神と身体の二元論と自然と文化の二元論がその典型的な表現です。「病

い」なるものを治療する医学における病気と患者の二元論、動物を「餌を与えなくてはならない機械」とする畜産学における人間と動物の二元論、国土整備における野生的なものと人工的なものの二元論、人間にとっての他者とみなされる自然との関係における開発と保護の二元論などもそうです。ケアの哲学は、他のさまざまな実践的なスキーム（オルタナティブとなるケア）や新しい概念体系（行動生態学、環境倫理学、動物倫理学）を動員することで、この自然主義と対峙し、それを内部から覆すことにならないでしょうか？ 人類学的に言えば、ケアというモメントは、西洋的な人間にとって世界をケアすることが何を意味するかという経験を再編成することに向けられるのではないのでしょうか？

6. ケアの統一性

ケアの概念は、実践的なものでもあるがゆえに、理論的なものに限定されないことを知っているとはいえ、ケアとさまざまな思想の伝統——概略的に言えば、キリスト教の慈愛の伝統、英語圏のプラグマティズムの伝統、現象学の注意の伝統——との間に、和解不可能な対立とまではいなくても、隔たりを観察することで事足りるとすべきでしょうか？ 実際、ケアの哲学は、理論でありつつ、「治療」でもあります。時には理論的な対立が、同じ方向を向いた具体的で効果的な実践的なコミットメントによってぼやけたものにされることもあります。同じような自発的で協同的なコミットメントを目指す規範的な選択肢が多くあることが、このことを容易に物語ってしまいます。

しかし、こうした多様性は、いくつかの共通要素によって支えられてもいます。まず、ケアは、さまざまな領域で形成される横断的なカテゴリーであり、複数の活動を「注意」という観点から統一するものです。実際、ケアは、私たちの中の自然（医療的なケア）、私たちの間の自然（教育、労働組織、例えば燃え尽き症候群の増加など職場での苦しみといった、他者と共にある世界を配慮する社会組織や制度に関わる実践）、そして私たちの外の自然（環境問題や地域における実践）に関わるカテゴリーです。ケアが主として医療ケアとの関係で評価されてきたとしても、ケアの哲学はそれをより広い地平へと開くものです。ここにこそ、私たちの体験しているこの世界に結びついた特権をもった生活をどのように配慮するかという問いが、そして、このケアの哲学がそれらにどのように連関するかという問いがあるのです。

次いで、ケアとは、多様な哲学的表現を通して、ケアのさまざまな手段のうちに統一性と目的性の問題を再び導入する一つのカテゴリーです。高度な専門性は、ケアの実践を道具化し特殊化するような操作的な対応を際限なく掘り下げることで、

ケアすること (prendre-soin) と施術すること (faire des soins)、ケア (care) と治療 (cure) を切り離してしまいます。ここで念頭に置いているのは、救急医療、移植医療、緩和ケアにおける高度な技術や、医師とケアラーの間に穿たれた断絶のことです。この場合、一方が技術的であり、他方が専ら関係的であると誤って考えられてしまうことがあります。あるいは、教育現場における専門家の介入の細分化も問題でしょう。ここでの争点は、ケアの目的を再定義すること、そして、その目的の合理性と手段の合理性の連関を再定義することです。私たちは、技術的・行政的なシステムを自動的に展開していくものとみなすことがありますが、ケアの倫理的・政治的次元は、こうしたシステムを自発的かつ効果的に問い直すのです。ケアの実践(ケアをすること) そのものには技術的・道具的なせわしなさがつきものですが、その根底には、ケアの統一性(ケアの倫理的・関係的目的)が存在します。この統一性とは、注意の倫理において展開されるものです。

「ケア」を単に手助けであると理解してはいけません。……ケアが技術的かつ臨床的な知識となるケース、さらに、単に否定的なものだけでなく肯定的で創造的ですからあるような関係性となるケースという二つの極端な(少なくとも権利上は)形をとるときには、実際上、手助けとなることもあるだろう²¹。

7. 傷つきやすい者たちの人間学

ケアの哲学は、哲学的人間学に関わる論点を共有していると同時に、ケアの実践がもつ多様性と専門性との間の統一性にも関わっています。ここまで後者については言及してきましたが、前者の人間学的な側面についても明示するべきでしょう。傷つきやすさに注意を払うケアの哲学にはさまざまなものがあります。ここでの傷つきやすさとは、欠陥——自律性の無能力——としてだけでなく、一つの能力として、つまり私たちの存在の関係性の次元の尺度としても考えられるものです。ウィニコット〔ドナルド・ウィニコット：イギリスの精神科医〕は、親によるケアというモデルを分析し(私たちはみな、自身がケア提供者になる前は、生まれてこの方、私たちが安心させ、私たちが存在することを保証してくれるケアの恩恵を受けてきた、というわけです)、これをケアの範例としました。近年見られるウィニコットの再読解はこうした人間学的な側面をはっきりさせるものでしょう。「ケアは傷つきやすさに未来を与えるものだ」とギョーム・ルブラン〔フランスの科学哲学者〕は述べていますが、ここでは傷つきやすさがどのような意味かを誤解しないでおくことが重要となります。実際、「傷つきやすさ」というレトリックは、個々人のエンパワーメントを統御す

る公共政策の特徴づける言葉ともなっています。

別の言い方をすれば、市場社会と「新自由主義」は、自律性を称揚することによって、依存することがあたかも失敗であるかのように軽蔑するのです。市場社会と新自由主義は生態系システムへの他律〔的な依存〕に関するさまざまな領域を作り上げますが、その際「プロジェクト」をスローガンとすることで、どのような生を送るべきかの空間的な経路システムを構築し、どうであってはならないか、どこにあるべきかを規定してきます。例えば、雇用の不安定さや失業、等しく標準化されて測定可能となった高齢者の依存性や脆弱性、障害者や病人の他律、公園や保護区など管理下に置かれた生態系システムの他律などです。こうした「依存の恥」に対して、市場社会と新自由主義は、一般化された自律という虚構を規範化した技術的・行政的な言語によって「ライフプロジェクト」を押しつけ、これを奨励したり命令したりすることで対応してきます。末期患者のライフプロジェクト、投獄された人のライフプロジェクト、重複障害をもつ人のライフプロジェクト、見捨てられた農村地域のライフプロジェクト等々は、人間関係、社会、環境という三つの次元における依存を露わにするものでしょう。これらは、リベラルな人間が大切にしている「自分自身の存在の起業家」となることができないという無能力を示しているのです。

とはいえ、「声なき者」や、書類や住居、仕事、家などが「ない者」、傷つきやすい者と今日みなされている人々の声を聞かせることを可能にするような抵抗のありかたを想像することができないわけではありません。私たちは、質的な研究報告、それほど抽象的ではない非定量的な研究報告、科学技術的な専門評価と対立する彼・彼女らの経験的知識への注目、アクションリサーチや貢献的な研究などによってもそのような人々をサポートすることができます。「傷つきやすい」人々というレトリックは、しばしば他者に対する権力の客観的な形態を強化することにもなります。関係的自律への注目は、人々や環境のもつ能力をコントロールするのではなく、むしろそれに同伴するものです。傷つきやすく、ケイパブルで、関係のうちに存在する人間の人間学は、人間の究極の本性を語るとうそぶきながらも人間について十分に考えてこなかった自由主義的个人主義によって形成された人間の考え方に異議を唱えます。こうした人間学は、この政治的リベラリズムの成果を否定はしませんが、経済的リベラリズムの限界に位置するのです。

社会的抑圧や支配の諸形態に対抗する諸個人の主権や自律性を認めることは、問題としてとりあげる以前に、既得のものです。とりわけより弱い立場にいる人々を保護するという観点から、普遍的で公平な正義の原則を政治学が探求することは、社会契約を鼓舞してきたものの核心にあるものです。しかし、ケアの哲学の多様性、そしてケアの哲学が向ける注意の多様性（病気の人間、動物、環境、職場の人間、都市空間）

という新たな人間学的状況は、経済と市場社会の暴力にむき出しの生を差し出そうとする標準的な功利主義的人間学や道具的合理性の悪弊に対して異議を申し立てます。とりわけ功利主義的人間学は、個人をホモ・エコノミクスというモデルによって考えていますが、そこではどのような存在も、個々人が自らの利己的な利益を競争のなかで最大化しようとするような交換関係のうちのみ存在することになります。これに対し、傷つきやすさの人間学は、功利主義的人間学がエージェントとアクター、交換と贈与、個人化されたものと個人化するもの〔個人を形成するもの〕、合理的な愚か者とケア提供者者を混同することで、個人とは何かについて十分に考えてこなかったと反論するのです。この批判は、ケアの制度やシステムの運営に大きな経済的・政治的影響を与えます。それは、個人化された実践だけでなく、個人を形成するような実践を制度やシステムがいかに構造化されているかを問うことになるでしょう。

自律を規範的な基準とする経済的個人は、傷つきやすさの他律とそれに起因する関係の依存において限界に直面する。依存は、支援への依存という視点だけでは理解できないからである。……個人であることの意味は、個人をケアしたり逆に無効にしたりする関係性への依存なのである²²。

8. 多様なケアの哲学と注意の倫理

要するに、ケアの哲学の多様性が明らかにしているのは、私たちの社会の多元的で世俗化された性格です。これは様々な規範的な選択肢において示されます。ケアの倫理は、ゲーム理論や手続き的倫理によって形成された行動科学の考え方とは一線を画しつつ、社会との抗争的な関係を保ちます。ケアの哲学は〔より〕包括的なものです。ケアの哲学は、倫理的・政治的な次元に加え、人間学的・存在論的な次元もっています。倫理的・政治的な次元においては、ケアの哲学や、ケアおよびその実践的な方向性がどうあるべきかを問題化する方法です。ケア (care) はしばしば、英語圏のプラグマティズムの伝統に基づく倫理的なアプローチによって主張されてきました。慈善や慈愛による倫理学は、道徳哲学や神学に比肩するような練り上げを喚起するものではないためにニュアンスを付け加える必要があるとしても、どちらかと言えば自然法に基づく義務論的な伝統もっています。そのような倫理学は、善、人格、尊厳といった観念を放棄することなく、倫理に対する道徳の基礎づけを促進しようとし、〔これに対して〕配慮の倫理学は、徳倫理的な意味における倫理的目標が、根拠の探求に対して先行することを主張します。この

配慮の倫理学は注意の倫理学によって説明されるでしょう。このような複数性を規律づけることなく秩序づけるために、どのような社会的・政治的空間が発明されるべきでしょうか？ 私たちの共和政の伝統において、友愛とは自由と合法性という形式的な原理を超えて結びつきの質を重視するカテゴリーですが、この友愛こそ、ケアの倫理の多様性を秩序づけ、そうすることで社会的なものの繊細な本質をケアするような方法になりはしないでしょうか？

ケアの哲学の多様性は、乗り越えることができないものなのでしょうか？ ①生きている者の価値を証明することを第一とする憐れみの哲学（憐れみは、行為の悲劇に直面した場合、苛立たせるような慈善にもなりかねません）、②ケアを支える実存的なもの、つまり傷つきやすい他者や注意によって触発されて存在することを記述する現象学的探求、③そして抗議の言葉を重視し、疎外された状態にあるケア関係からの解放を求める配慮の哲学、これらの間に断絶が存在していることは明らかです。ケアの哲学の類型化は、これらが異なる言説的次元に応じて変化することを明らかにします。まず、関係性の存在論という次元は、注意の現象学によって説明されます。また、人間学的な次元は、人間の傷つきやすさとは依存を恥じることのない開かれたケイパビリティであるという関係的な自律の概念のうちにケアを据えます。そして、ケアの実践的な次元は、如何ともしがたい傷つきやすさに対して倫理的・政治的な対応を試みる次元です。この三つの次元は相互に関連していますが、これら三つの次元で読み取れる多様なケアの哲学をまとめる主たる言葉は、注意でしょう。注意は、深く感じることの重要性を強調し、ケアの技術、倫理実践、制度といった様態において展開されるものを、感性と想像力の様態（傷つきやすい者に対して同類であるという想像力を感じさせること）において示します。ケアは、傷つきやすい人間という考え方を積極的に引き受ける仕組みであると同時に、配慮や注意のうちで他者によって触発されることを許容する傾向性でもあります。かくしてケアの哲学は、関係的な存在論（注意の関係は実体的な真理に先立つ第一のものです）に基づき、傷つきやすさの人間学（その規範的範囲は傷つきやすさとそれに応答しなければならないという感情が私たちを義務付けることにあります）から出発することで、効果的なケアの実践（倫理的・政治的範囲）を展開するのです。

【訳注】

- 1 プラトン『テアイテトス』149a1-2
- 2 Warren T. REICH, « History of the notion of care », *Encyclopedia of Bioethics, Revised Edition*, New York, Simon and Shuster Macmillan, 1995, p. 319-331. (=「ケア概念の歴史」森岡崇訳、『生命倫理百科事典』、丸善出版株式会社、2007年)

- 3 *De peccatorum meritis et remissione*, I, III, 3, cité par Jean-Louis CHRÉTIEN, *Fragilité*, Paris, Minuit, 2017, p. 8. (=アウグスティヌス「罪の報いと赦し」、『アウグスティヌス著作集』第29巻、教文館、1999年)
- 4 Alexis PHILONENKO, *Jean-Jacques Rousseau ou la pensée du malheur*, Paris, Vrin, 2002.
- 5 Paul RICCEUR, *La Métaphore vive*, Paris, Seuil, 1972. (=ポール・リクール『生きた隠喩』久米博訳、岩波書店、2006年)
- 6 Florence WEBER, *Handicap et dépendance. Drames humains, enjeux politiques*, Paris, éditions Rue d'Ulm, coll. « Collection du Cepremap », 2011.
- 7 Günter ANDERS, *L'Homme sur le pont. Journal d'Hiroshima et de Nagasaki*, trad. Denis Trierweiler, *Hiroshima est partout*, Paris, Seuil, 2008, p. 202. (=ギュンター・アンダース『橋の上の男——広島と長崎の日記』篠原正瑛訳、朝日新聞社、1960年)
- 8 Dominique BAQUE, *L'Effroi du présent. Figurer la violence*, Paris, Flammarion, 2009, p. 60. 美的注意に関する課題は「近すぎず、遠すぎない視線を、そして猥褻でも、無関心でもない視線を発明すること」(ibid., p. 259)ではないだろうか？
- 9 « L'amour des autres, care, compassion et humanitarisme », *Revue du Mauss*, Paris, La Découverte, 2008, n° 32.
- 10 Axel Honneth, *La Lutte pour la reconnaissance*, Paris, Folio, 2013. (=アクセル・ホネット『承認のための闘争』山本啓・直江清隆訳、法政大学出版局、2014年)
- 11 Guillaume LE BLANC (dir.), *Capitalisme et démocratie. Autour de l'œuvre d'Axel Honneth*, Lormont, éditions Le Bord de l'eau, 2015.
- 12 Martha NUSSBAUM, *Capabilités. Comment créer les conditions d'un monde plus juste* (2011), trad. Solange Chavel, Paris, Flammarion, 2012, p. 202.
- 13 Patricia PAPERMAN et Sandra LAUGIER (dir.), *Le Souci des autres. Éthique et politique du care. Raisons pratiques*, Paris, Éditions de l'École des hautes études en sciences sociales, 2005.
- 14 Frédéric WORMS, *Le Moment du soin*, Paris, PUF, 2010.
- 15 Guillaume LE BLANC, *Que faire de notre vulnérabilité*, Bayard, 2011.
- 16 フレデリック・ヴォルムス、ギヨーム・ブルラン、ファビアンヌ・ブルジュール、ナタリー・ザツカイ＝レイナーズが参加した雑誌『エスプリ』の「ケアの新たなかたち」(2006年1月号)の出版は、少なくとも現代フランス哲学の枠内でのこの解釈的再構成の結晶の一つである。
- 17 *Le Moment du soin*, op. cit., p. 8. 原著者による強調箇所。
- 18 Jean-Claude GENS, *Éléments pour une herméneutique de la nature. L'indice, l'expression et l'adresse*, Paris, Cerf, 2008.
- 19 Fabienne BRUGERE, *Le Sexe de la sollicitude*, Lormont, éd. Le Bord de l'eau, 2014 は、「配慮を女性的でなくすること、つまり配慮を脱ジェンダー化すること」を探求している (p. 17.)。
- 20 Philippe DESCOLA, *Par-delà nature et culture*, Paris, Gallimard, 2005. (=フィリップ・デスコラ『自然と文化を越えて』小林徹訳、水声社、2020年)
- 21 Frédéric WORMS, *Le Moment du soin*, op. cit., p. 249.
- 22 Guillaume LE BLANC, « Le libéralisme est-il un individualisme ? », dans Fabienne BRUGERE et Guillaume LE BLANC (dir.), *Le Nouvel Esprit du libéralisme*, Lormont, éd. Le Bord de l'eau, 2011, p. 54.

解題：ジャン＝フィリップ・ピエロンのケアの哲学をめぐって

本稿は2023年4月13日に立教大学において行われたワークショップ「フランスにおけるケアの哲学／倫理学の現在」でのジャン＝フィリップ・ピエロンの発表原稿の翻訳である。当日は、立教大学文学部文芸・思想専修の渡名喜庸哲が司会および通訳を、同学部フランス文学専修の澤田直がコメントータを務めた。

ジャン＝フィリップ・ピエロンは現在ブルゴーニュ大学教授をつとめる哲学者である。彼の関心は現代フランス哲学研究からケア、エコロジー、医療倫理、環境倫理と多岐にわたるが、彼の仕事は日本ではほとんど紹介されてこなかった。日本語で読めるものとしては、本稿が初だろう。それゆえ、本稿の理解の助けになるよう、彼の経歴および仕事について若干紹介をしたい。

ピエロンは1964年にフランス東部のナンシーに生まれ、1990年に哲学教授資格取得、93年ストラスブール大学を卒業した後、2000年に国家博士号を取得した。リヨン第三（ジャン・ムーラン）大学を経て、現在ブルゴーニュ大学教授を務めている。

ピエロンの主な仕事は、まず20世紀のフランス哲学研究に位置づけられる。しかも、いわゆる「フーコー、ドゥルーズ、デリダ」といった「現代思想」の力強い流れの傍らにあって、なかなかフランスの外からは見えにくい、それでも確かに脈打っていた重要な動脈に注目する点に特徴がある。なかでもガストン・バシユラル、ウラディミール・ジャンケレヴィッチ、ポール・リクール、アンリ・マルティネらに関する研究は注目に値する。

ただし、ピエロンの仕事を特徴づけるのは、2010年の『傷つきやすさ——ケアの哲学のために』以降に精力的に展開される「ケアの哲学」だろう。英語圏に遅れをとっていたが、フランスでは2000年代から「ケア」が哲学／倫理学研究の主題として活発に取り上げられるようになる。『エスプリ』誌の2006年の特集号「ケアの新たなかたち」を一つの契機として、分析哲学研究のサンドラ・ロジエ、科学認識論のギヨーム・ルブラン、バルクソン研究のフレデリック・ヴォルムス、政治哲学研究のコリーヌ・ペリュションといった、それまでさまざまな領域で活躍していた哲学者・哲学研究者たちがこの主題に関心を示すようになるが、ピエロンの仕事もこうした流れに位置づけられる。

そのなかでピエロンの独自性は、ケアの哲学ないしケアの倫理をめぐり、英語圏での議論はもとより幅広い哲学・倫理学研究に目配せしつつも、環境倫理やエコロジー、医療倫理、さらに死生学、情報技術・デジタル技術といった広範な観点から精力的な研究を展開している点にある。今回、日本語で読まれることになったこの講演原稿は、その主著の一つである『自然と人間をケアする——医学、労働、環境』

の一部に基づくものだが、その表題を見るだけでも、ピエロンの関心の射程が伺えるだろう。

このワークショップを開催するにいたった経緯も補足しておいたほうがよいだろう。そこには、大きく二つの理由があった。一つはより個人的なもので、澤田直と渡名喜は、2022年7月、フランスの哲学者コリーヌ・ペリュションと共同で、フランスのスリジー＝ラ＝サルにて「レヴィナスとメルロ＝ポンティ―身体と世界」というシンポジウムを行った。ペリュションは、日本でも『糧』という著作で知られているが、環境倫理、生命倫理でもフランスで目立った仕事をしている。ペリュションからの紹介を受け、澤田と渡名喜は、2023年の6月にピエロンが主催する人工知能とケアをめぐるシンポジウムへの参加の打診を受けた。ピエロンがそれに先立って、ケアとマネジメントを主題とする調査のために来日するという知らせを受け、ぜひケアの哲学に関する仕事について直接講演してほしいと打診したのが第一のきっかけだった。

だが、第二の理由はいっそう本質的なものである。すなわち、講演のタイトルとなっているフランスにおけるケアの哲学／倫理学の特殊性に関してである。「ケア」をめぐる問題は、社会学・教育学・心理学・医学・看護学等の分野においてだけでなく、近年、哲学／倫理学でも重要な主題として議論されている。ただし、この分野で日本で紹介されているのは英語圏の議論が支配的のように思われる。ピエロンをはじめ、フランスではその哲学的伝統に基づきつつ、ケアの哲学／倫理学の領域で独特の議論の展開がなされているが、そうした議論についてはなかなか情報が入ってきていないし、研究や紹介も進んでいない。唯一、貴重な例外として、白水社の文庫クセジュから、ファビエンヌ・ブルジュール『ケアの倫理』が出ているくらいである。本ワークショップは、ピエロンの来日という願ってもない機会を利用し、フランス語圏におけるケアの哲学／倫理学研究に関してお話を伺いたいというのが第二の、そして主たる動機であった。「ケア」と言っても、単に人対人の関係における倫理性のみならず、世界との関係、自然との関係、さらには今日の社会を席卷する新自由主義ないし功利主義的な思考様式への批判的な考察など、さまざまな観点からケアの問題が検討されるのが見てとれるだろう。

参考までに、ピエロンのこれまでの研究について表題の邦訳を添えて以下に示しておく。

[単著]

- 『証人の通過——証言の哲学』(Le passage de témoin : une philosophie du témoignage, Cerf, 2006)
- 『傷つきやすさ——ケアの哲学のために』(Vulnérabilité : Pour une philosophie du soin, PUF, 2010)
- 『ガストン・バシュラールの夢想』(Les rêveries de Gaston Bachelard, Les petits Platon, 2011)
- 『リクール——学校で哲学する』(Ricœur : philosopher à son école, Vrin, 2016)
- 『水の詩学——もう一つのエコロジーへ』(La poésie de l'eau : Pour une nouvelle écologie, Les Pérégrines, 2018)
- 『自然と人間をケアする——医学、労働、環境』(Prendre soin de la nature et des humains : Médecine, travail, écologie, Les Belles Lettres, 2019)
- 『私は私たち——生きものとの相互依存についての哲学的考究』(Je est un nous : Enquête philosophique sur nos interdépendances avec le vivant, Actes Sud, 2021)
- 『ケアの哲学——経済、倫理、政治、美学』(Philosophie du soin : économie, éthique, politique et esthétique, Hermann, 2021)
- 『山のように瞑想すること——大地およびそこに住まうものたちへの注意のための霊操』(Méditer comme une montagne : Exercices spirituels d'attention à la Terre et à ceux qui l'habitent, Editions de l'Atelier, 2023)

[共編著]

- 『保たれた言葉——リヨンにおけるマルディネ 100 周年シンポジウム』(Jean-Pierre Charcosset et Jean-Philippe Pierron (dir.), Parole tenue : colloque du centenaire Maldiney à Lyon, Mimésis, 2014)
- 『死とケア——ウラディミール・ジャンケレヴィッチをめぐって』(Élodie Lemoine et Jean-Philippe Pierron (dir.), La mort et le soin : autour de Vladimir Jankélévitch, PUF, 2016)
- 『環境正義と環境不正義』(Cyrille Harpet, Philippe Billet, Jean-Philippe Pierron, Justice et injustices environnementales, L'Harmattan, 2016)
- 『水の政治的エコロジー』(Jean-Philippe Pierron (dir.), Écologie politique de l'eau. Rationalités, usages et imaginaires, Hermann, 2017)
- 『ケアの価値——倫理、経済、政治的論点』(Jean-Philippe Pierron, Didier Vinot, Elisa Chelle (dir.), Les valeurs du soin : Enjeux éthiques, économiques et politiques, Seli Arslan, 2018)
- 『人間、動物、自然——来るべき世界のためにいかなる徳倫理学が必要か』(Gérald Hess, Corinne Pelluchon, Jean-Philippe Pierron (dir.), Humains, animaux, nature : quelle éthique des vertus pour le monde qui vient?, Hermann, 2020)
- 『コロナ禍に直面した医療倫理』(Jean-Philippe Pierron (dir.), L'éthique médicale à l'épreuve de la Covid-19, PU-Dijon, 2020)
- 『同意の製造——理解すること、受容すること、同意すること』(Jean-Philippe Pierron (dir.), La fabrique du consentement : comprendre, accepter, consentir, Bord de l'eau, 2022.)